

主 題：遜られた王の前に遜って生きる

聖書箇所：ピリピ人への手紙2章9－11節

テーマ：再び高く上げられた“遜られた王”の前に賛美をささげ、犠牲を払って生きていくこと

今朝、新しい一年を始めるにあたって皆さんと一緒に考えたいこと、それは、「遜られた王の前に遜って生きる」ということです。ピリピ2章を開いてください。先月から私たちはこのピリピ2章、特に5節からイエス・キリストの降誕について学んできました。また先週のクリスマス礼拝でも6－8節を中心に、この世にお生まれになったイエス・キリストが一体どのようなお方だったのかをともに考えました。救い主の誕生がいかに最高の知らせなのか、どれほど私たちひとりひとりにとって喜びをもたらす出来事なのかをみことばから見ました。改めて、神の御子がへりくだって人として来られた、というこの事実は測り知れないほどすばらしく、確かに私たちのうちに感謝や賛美をもたらすものであったと思います。

さて、こうして愛する救い主の誕生を皆さんと一緒に祝いしてから早一週間が経ちましたが、ぜひ今、自分のうちに問いかけてみてください。先週キリストの誕生を覚え抱いた大きな喜びを、あなたは今変わらずに持っているでしょうか？果たしてその心には今も変わらずに賛美があふれているでしょうか？それとも、年末の忙しさやほかの何かに心が奪われて感謝を忘れてしまっていないでしょうか？

思い返してみれば、歴史上このようなことがありました。ご存じかもしれませんが。今から百九年前、1914年、ヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発し、熾烈な争いが繰り広げられていました。記録に残されているだけでも、イギリス、フランスなどを中心とする連合軍が、約四百八十万、ドイツ、オーストラリアなどを中心とする同盟軍が約三百三十万人、計八百万人以上の死者を出したとされるそのような戦争があったのです。しかしそんな戦争の最前線で銃声がやんだ瞬間がありました。それは後に“クリスマス休戦”として語り継がれている出来事でした。戦場で敵対するドイツ軍とイギリス軍は、クリスマスの日、互いを攻撃するのをやめて、塹壕の中でクリスマスの賛美などを歌い始めたのです。また、その時の様子をロバート・パトリック・マイルズ大尉もこのように手紙に記していました。「金曜日（クリスマスの日）。私たちは考え得る限り最も特別なクリスマスをお過ごししている。…事の発端は昨夜、白い霜が降りる厳しい寒さの夜、ドイツ軍が我々に向かって『メリークリスマス、イギリス人』と叫び始めたのだ。もちろん仲間も叫び返し、やがて両軍の多数の兵士が丸腰で塹壕を出て、銃声が響く戦線の間にある無人地帯に集合した。そこで今夜の真夜中過ぎまで互いに発砲してはならないという取り決めが、全て自分たちの判断で為されたのだ。男たちは皆、有効を深め、最高の友情のうちにたばこや冗談を交わし合った。その夜は一晩中、一発も発砲されることはなかった。」と。すばらしい出来事がクリスマスの日に起きました。激しい争いがやんだのです。しかしその翌日はどうなったと思います？悲しいことに彼らは互いに銃を構えて戦っていました。束の間の静寂は終わったのです。今読んだ手紙を記したマイルズ大尉も大晦日を前に戦死したとされています。クリスマスに抱いた喜びは、次の日には失われていました。

そしてこれと同じことが私たちの歩みにも起こってしまうことがあるのです。ありえないほどの犠牲を払ってへりくだられた王の誕生を確かに心から喜んでいたとしても、そのすばらしさが次第に自分のうちで薄れていってしまうことがあります。日々いろいろなものに心が奪われ、最高の喜びの知らせにではなくて、何かほかのものに喜びを見出そうとしているかもしれません。そして、キリストが現れた犠牲の大きさ、へりくだりの姿というものを忘れてしまえば、当然、それにふさわしい感謝をささげることも、その模範にならって成長していくことも難しくなります。神の家族として生きている信仰者が

互いの中で示すべき謙遜も、キリスト・イエスのうちに見られるものではなくて、私たち自身が勝手に考えるものになってしまうのです。だからこそ皆さん、この一年を始めるにあたっていま一度、愛するイエス・キリストの姿と一緒に目を留めてみましょう。

特に私たちがこれから見る9-11節の部分は、今まで見てきたもののクライマックスと言っても過言ではないでしょう。この部分で、私たちが仕えるキリストがただへりくだってこの世に来られた、十字架で死なれた、というだけではなくて、その後すべてのものより高く上げられたお方なのだ、ということが描かれているのを見て取れます。もっと言えば、私たちはこの箇所の中に、へりくだられた後のキリストの栄光にあふれた偉大な姿を、特に三つ見て取ることができます。ですからぜひ、自分にはイエス・キリストなど関係ない、と思われている方も、この新しい年の初めにみことばから、そもそもイエス・キリストがどのようなお方なのかを自分のこととしてよく考えてみてください。また、すでに自分のこととして知っていると言う皆さんも、改めて自分はどうのような主に救われて、またどのような主に今従っているのだろうかということに心を留めてみてください。このみことばを通して私たちみながますますキリストのすばらしさを知って、きょうだけでなくこの新たな一年、主に喜んで仕えて、この方をほめたたえる者として成長していくその助けと励ましになることを、心から祈っています。では、これまでの復習も兼ねて5-11節までをお読みします。

ピリピ2：5-11

「5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです：6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、：8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。：9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。：10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、：11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

○遜って生きるために：遜られた後のキリストの三つの姿 9-11節

1. キリストは遜ったゆえに高く上げられた方 9a節

まず、一つ目に見て取れるキリストの姿は、「キリストは遜ったゆえに高く上げられた方」です。もう一度9節を見てください。「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」ここで皆さんに注目してほしいのは、最初のことばです。パウロは9節を「それゆえ」という接続詞で始めていました。別のことばで置き換えるなら、「この理由のために」、「結果として」ということです。イエス様はある結果として、父なる神様によって高く上げられました。でも一体それはなにゆえだったのでしょうか？もちろんそれは、これまでに私たちが見てきた6-8節の内容「イエス・キリストがへりくだられたことによって」でした。よく思い返してみてください。6節からみことばを見ていくと、みことばははっきりと「イエス様は神の御姿である方」だと描いていました。この方は昔も今もこの先も変わる事など決してない、すべての初めから永遠の神様だ、と教えられていたのです。この方はすべてを造られて、すべてを支配されている力ある主権者でした。またありとあらゆることをご自分の思いのままにすることができる権利や特権を持っておられるお方だったのです。この方が神様だったからこそ、天においても地においても当然ほめたたえられるべき存在でした。しかしそのように偉大な永遠なる神様が、ご自分を無にされたのです。ご自分を無にして仕える奴隷の姿をとって、完全な人となりました。天におられた時も地上に来られた時も、この方は変わらず神様でした。でも、だれかに強制されたのではなく自ら進んで従順な者となって、さまざまな痛みやはずかしめを受けてイエス様は死を味わわれました。イエス様は、やがていつの日か必ず死を迎える私たちとは全く違うお方でした。この方は始まりもなければ終わりもない、この世界が誕生するよりも遥か前から永遠におられる

存在でした。しかし、ご自分のうちにいのちがあって、ご自分の思いのままにいのちを与えることのできるそのような神様が、喜んでご自分のいのちを手放されたのです。この方は、本来ではありえないような犠牲を払って苦しみました。でも同時に、イエス様ご自身がへりくだって死にまで従われたというだけでなく、この方は実に十字架の死にまでも従われたお方でした。一切の罪もないお方が、完全にいつも正しいそのような神の御子が十字架の上で死なれたのです。これは何度も言っていますが、イエス様は初めから変わることのない永遠の神様でした。人となられた時も変わらない神様の栄光の輝きでした。だからこそこの方は、本来ならただ誉れと賛美のみ価するお方であり、父なる神様の呪いも御怒りも一切味わう必要のない存在でした。しかしイエス様はご自分のことを顧みるのではなくて、心から喜んで自ら十字架へとかかって行かれたのです。そして本来なら受ける必要もない痛みや恥を味わって、罪の全くないお方が私たちの身代わりとなってその身に御怒りを受け、苦しみ死なれたのです。この方は測り知れないほどの犠牲を払ってご自身をへりくだらせたお方でした。それゆえに、神様はこの方を高く上げられたのです。みこころに従って最も低い所へとへりくだられたイエス・キリストはそれで終わったのではありません。へりくだられた方は、再び高い所へと上られました。

そしてそのような主の姿のうちに、私たちが覚えることのできる大切な一つの原理を見て取ることができます。一体何か？それは、「神様は遜った者を高く上げてくださるお方」だということです。このことに関しては別のみことばも繰り返し教えていました。たとえば旧約聖書を見ても、箴言22：4に「謙遜と、【主】を恐れることの報いは、富と誉れといのちである。」と。また旧約だけではなく新約を見てもこのようにあります。ヤコブ4：6、10「ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいませ。」みことばは繰り返し繰り返し、へりくだった者を神様が高く上げてくださる、と教えていました。またほかのだれでもないイエス様ご自身も、高慢な律法学者やパリサイ人を前にして何度も同じことを教えるのです。覚えていますか？ある時イエス様がパリサイ派の指導者に食事に誘われて家に入ると、ほかに招かれた人たちが上座を選んでいる様子を目にすることがありました。イエス様はそんな人々に対してたとえを使ってこう話されるのです。ルカ14：8－11にこう書いています。

「：8 婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、：9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。：10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは満座の中で面目を施すことになります。：11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」と。またある時は、自分が正しいと自負してほかに人たちを見下しているような人たちを目にし、このように教えられることもありました。同じルカ18：10－14にこう書いています。「：10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。：11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。：12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』：13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』：14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」自分自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされると。これが、みことばが何度も何度も教えていた原理でした。そしてこの原理こそ、まさにイエス様ご自身が歩まれた生き方でもあったのです。このイエス様こそ、自己中心になって高ぶるのではなくて、犠牲を払ってへりくだり、実に神と人ともに仕えられたお方でした。イエス様はただの口だけの偽善者ではありませんでした。私たち

は、イエス様がほかのどんな人よりもご自身を低くして後に続く者たちに模範を残された姿を見て取ることができるのです。

ここでちょっと立ち止まって考えてみてください。私たちがこのようにパウロのことばを学んできている中で、私たち信仰者の歩みにとって“謙遜”というものが欠かせないものだ、と教えられました。神の家族が一致して生きていこうとするなら、キリストのうちに見られるような心構えを、へりくだりを持って互いに仕え合っていくことが求められていたのです。でも私たちは時に、へりくだることに難しさやためらいを感じてしまうことがあるかもしれません。一体どんなときに私たちは難しさを覚えるのでしょうか？いろいろなことを挙げることができますが、たとえば、私たちは自分のしていることが認められなかったり、正しい評価が下されなければ不満や苛立ちを簡単に覚えたりしないでしょうか？またほかの人に懸命に仕えている中で、全く感謝されなかったとしたらどうでしょう？たとえ犠牲を払って見えない所でへりくだって仕え続けていたとしても、いつまでもだれにも覚えられなかったとすれば、果たしてやっていることに意味があるのだろうか、疑問を抱いて仕えることをやめてしまうかもしれません。私たちは時にだれかに認められることを求めている、また周りの人たちに感謝されることだけを求めていることもあるかもしれません。そしてそれが得られなければ、仕えることをやめてしまうかもしれません。しかしそんなときにこそ、私たちの愛する主はご自身を最もへりくだらされたからこそ、高くあげられたのだということを覚えることができるのです。イエス様はご自身を最もへりくだらされたからこそ高く上げられました。本来ならこの方はご自分こそ仕えられるべき神の御子なのに、自ら進んで何も持たない奴隷となられたのです。この方はその従順さのゆえにご自分を死にまでも、実に十字架の死にまでも至らせました。そしてそのようにして喜んで自らを低くされたからこそ、その結果、神様は大いにそのことに報いておられました。

同じように私たちもこの神様の約束を覚えることができます。確かにへりくだって仕えていくということは、大きな犠牲を伴うものです。もしかすれば、私たちが自らを低くして仕えようとしても、だれにも認められないことがあるかも知れません。熱心に自分をささげたとしても感謝されないばかりか、いつまでも相手は問題をもたらし続けるかもしれません。しかし、私たちはそれらすべてを神様に委ねることができます。仕えることにためらいを覚えるとき、この一年、私たちが日々神様を求めて互いに仕え合う者として生きていくときに、ためらいを覚えることもあるかもしれません。そんなときは、喜んで自分を低くする者を愛してくださる神様が目を留めてくださるのだと、その神様の目を覚え続けることです。私たちは信頼して、この方のその目を覚えて歩み続けていくことができるのです。ペテロもこのように述べていました。Ⅰペテロ5：6に「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」いつかはわかりません。でも神様がちょうど良い時に私たちを高くしてくださるのだと、へりくだられたゆえに高くあげられたお方、これが、私たちが最初に見て取ることのできるイエス・キリストの一つ目の姿でした。

2. キリストはすべてにまさって偉大な方 9b節

次に二つ目のキリストの姿を9節の続きに見て取ることができます。二つ目の姿は「キリストはすべてにまさって偉大なお方」です。9節はこのように続いていました。「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」ここで「高く上げて」と訳されていたことばは、新約聖書の中でこの箇所にはしか出てきません。そしてこのことばには、「最も高い位置に上げる」とか「最高点まで高める」といった意味があります。最も高い位置に上げるということです。パウロはこの箇所であえてこのことばを用いました。そして最も低くなられたイエス様が、今は最高の栄誉と権威を持つそのような地位へと上られたことを強調していたのです。この方はほかのどんなものとも一線を画す、すべてに勝って力ある地位を占めるようになりました。またこれに続くことばも同じです。「この方を高く上げて」その後こう書いていました。「すべての名にまさる名をお与えになりました。」と。この

「お与えになりました」ということばも興味深いもので、もともとのことばであるギリシャ語を考えてみても、これには「恵み」を意味する「カリス」から派生した「カリゾマイ」ということばが使われています。ギリシャ語を置いておいたとしても、皆さんこのことばの派生元は「恵み」ということばから出ているのです。要するにこの「お与えになりました」ということばを考えれば、このことばには「惜しみなく恵み深く与えること」「贈り物として与えること」といった意味が含まれているのです。つまり神様は、みこころに従ってへりくだられたキリストに対して、恵みによってあふれんばかりの祝福を、もっと言えば、すべての名にまさる名をお与えになりました。ここで、「名が与えられた」ということの何が凄いのだろう？と思う方がいるかもしれません。確かに今の私たちにとって「名前」というのは、だれかとだれかを区別するものでしかないかもしれませんが。でもこの当時の社会において「名」というのはそれ以上の意味がありました。「名」とは、その人の特徴や本質であったり、また名声や評価というものを表していたりするのです。つまりこの箇所「父なる神様がすべての名にまさる名をキリストにお与えになった。」とパウロが口にしたとき、これはキリストがほかの何物にもまさる名声を、地位や評価というものを与えられたということの意味していたのです。ジャン・カルヴァンという人も、このことばに関して次のような説明をしてくれていました。「したがって、その意味は、最高の力がキリストに与えられ、この方が最も名誉ある地位に置かれたということ、ゆえに天にも地にもそれに匹敵する威厳を見出すことはできないということである。」イエス・キリストには何者も匹敵することのないそういった威厳が与えられたのだと。もちろん勘違いして欲しくないことは、パウロはここで、キリストが何か神様以上の存在になったというような話をしていたのではない、ということです。何か与えられて人となる以前よりも優れた神様以上の存在になったというような話をしていたのではありません。なぜそう言えるかと言えば、これまでずっと見てきましたが、イエス様は人として来られる前もこの世に来られた後も変わらない神様でした。この方が神様でなくなったことなど一瞬としてありませんでした。この方が神様だったからこそ、時にこの方はその力やみわざを人々の前で明らかにして、嵐を静めることもあれば、人々の考えを読み取ることもありました。変わらずにこの方は神様でした。しかし真に人となられたからこそ、イエス様はいつも人々の前で、そのような力をすべて完全に現わすことはなさいませんでした。イエス様は神様として持つておられたそのご自身の権利や力というものを一時的に無とされたのです。失ったものではありません。そういったものを無とされました。またもっと言えば、世界の始まる前からイエス様は永遠に神様であったからこそ、本来ならば天においても地においてもすべてのものからほめたたえられるべきそのようなお方でしたが、この方はそのあり方を捨てられないとは考えずに、ほめたたえられるべきそのようなお方が、人に軽んじられて軽蔑されるような者になられたのです。人に仕えられるべきそのような主人が、人に仕えるしもべとなりました。ですから間違いなくイエス様というお方はこの世にあって、確かにいつも完全な神様でした。しかしそういった神様として持つておられた権利や力、本来であれば価する称賛というものを自ら進んで横に置かれました。そしてそのようにしてご自身をへりくだらされたからこそ、父なる神様はこの方を高く上げられました。すべてのものにまさる最高の力を再び与えられたのです。本来価するその栄光にあふれた地位というもの、称賛というものを、再びイエス様に与えられました。まさにこれはイエス様がささげていた祈りの答えでもあったのです。ヨハネ17章でイエス様はこのように祈っておられました。ヨハネ17：4-5「4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持つていましたあの栄光で輝かせてください。」と。

さて、今いろいろ見ましたが少し立ち止まって考えてみましょう。へりくだられた王であるイエス・キリスト。このイエス・キリストは一体どんなに高い所から低い所へと下られて、そしてまた再び高い所へと上られたのでしょうか？永遠の初めから存在しておられたこの神の御子は、救い主としてこの世に

来られました。そして確かに一度、ご自身のいのちをささげられたのです。いのちであるそのお方が自ら進んでへりくだってはずかしめを受けて、実に十字架の死にまでも従われました。本来であれば私たち罪人の上に注がれて当然のその罪の罰というものを、この方が身代わりとなって十字架で受けて、罪に対して燃え上がる神様の御怒りを代わりになだめてくださいました。神の御子が大きなあわれみのゆえにその身をささげるといふ、そんな測り知れないほどの犠牲を払って、私たちにはどうすることもできない罪の問題を、この方が解決してくださったのです。

しかしこれで話がすべて終わりではありませんでした。イエス様は十字架でただ死んで終わりではなかったのです。この方は約束されていたとおりに墓に葬られ、その三日後によみがえられました。その様子がこのように描かれています。マタイ 28 : 5-6 に「:5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。:6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。」」イエス様は確かに十字架にかかられました。そして確かに墓に葬られました。しかしイエス様のからだが入れられたその墓の中は、空っぽでした。ここで皆さん、考えてみてください。もし当時のユダヤ人指導者たちが、またほかのだれかが、このキリストに対する信仰であれ、希望というものを本気で潰そうとしていたら、彼らはたった一つのことをすればよかったのです。何か？それは、墓に葬られてそのままになっているイエス様のからだを人々に見せることでした。もしイエス様のことを憎んでいるそのような者たちが墓に葬られたままになっているイエス様のからだを人々に見せさえすれば、人々は、この方は神の御子でも何でもなし、救い主でも何でもなし、ただの人間だった、とそう認めるようになったのです。「死んだ後で、わたしは復活する」などと嘘をついていた偽り者だったと、公に述べることさえできました。でもそれはかないませんでした。なぜなら墓にはキリストのからだがなかったからです。そしてそのことをイエス様の弟子たちだけでなく、イエス様を憎んでいた祭司長たちも認めて、こう言うのです。先の続きのマタイ 28 : 13、15 「こう言った。『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。」「…それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。」と。イエス様の敵たちでさえ、キリストのからだは墓からなくなっているということを知っていました。でも、それでもどうにかしてその真実が広まらないようにと、「弟子たちが盗んで行った」と、そんな噂を流すようにしていたのです。当時の人たちの中にはこのうわさを信じた者たちもいました。でも彼らも知っていたのです。キリストの入れられていた墓は、今は空っぽになっているということ、そこに入れられていたイエス様のからだはなくなっているのだということ。そして、私たちの身代わりとなって十字架で死んでくださったそのお方は、それで終わりではなくて、その死に勝利してよみがえられました。神の神子が墓の中に閉じ込められたままであるなどあり得なかったのです。

でも、このように死からよみがえられただけですべてが終わりではありませんでした。イエス様はよみがえられただけではなくて、地上から天へと昇られました。この方は栄光と誉れを受けて父なる神様のもとに戻り、支配者としての右の座に着かれました。このようなことばが、みことば中に繰り返し出てきます。I ペテロ 3 : 22 に「キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます。」またヘブル 2 : 9 を見てみても、「イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。」そしてエペソ 1 : 20-22 に「:20 神は、その全能の力をキリストのうち働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、:21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。:22 また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。」これが、私たちが愛しているイエス・キリストの姿でした。この方は確かに十字架にかかって死なれました。最もご自身のことをへりくだらせて

低くなられたのです。しかし同時に、この方はその死の力に勝利してよみがえって、天においても地においてもすべての支配や権威、権力を持つそのような最高の地位へと再び上られたのです。この方こそ、今も生きておられる偉大な勝利者、栄光にあふれた主の主、王の王でした。すべてにまさるそのようなお方が私たちとともにいてくださるのです。私たちの弱さに同情してくださり、あわれみを示してくださるそのような大祭司として、私たちとともにいてくださるのです。すばらしいことだと思いますか？確かに私たちの歩みにおいては難しいこともあります。弱さを覚えることもあるし、悲しいこともあるし、この一年も難しさ、いろいろな試練に直面することもあるでしょう。でも、私たちにはこのイエス・キリストがともにいてくださるのだと。そのようなお方がともにいてくださることは、私たちにとって励ましではないでしょうか？すべてにまさって偉大な方、これが、私たちが覚えなければならないイエス・キリストの二つ目の姿でした。

3. キリストはすべての者によって礼拝される方 10-11節

そして最後三つ目の姿として見て取れるもの、それは「キリストはすべての者によって礼拝される方」です。残りの10-11節にこのように記されていました。「:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」ここに私たちは、へりくだられた王に対する人々の応答を見て取ることができました。はっきりと記されていましたね。すべての人は、この世にへりくだって生まれ、再び高く上げられた方に対してひざまずいて、「イエス・キリストは主である」と告白するようになります。この「主」という名は、もう皆さんもよくご存じでしょう。このことばには「主人」であったり、「権威や地位を持っている者」を表す意味が含まれています。ジョン・マッカーサー先生もこんな説明をしておられました。「主とは、それが誰であれ、他の全ての人の上にいるものです。絶対的な支配権を持ち、主人として服従される権利があるのです。」イエス・キリストは絶対的な主権を持っておられる神様でした。そのような「主」でした。確かにこの方は一度ご自身をへりくだらせて最も低くなられました。神の御姿である方なのに、みこころに従って、ご自分の大きな愛のゆえに、ご自身を無にして仕える奴隷となられたのです。文字通りすべてを持っておられるお方が、何も持たない者になられました。でもそんな犠牲を払ってへりくだられたお方は、再び高く上げられました。奴隷となられたお方は、すべての力や権利、称賛を受ける最高の主人となられたのです。この方こそ、唯一まことの神様でした。すべての主権者であり、今もなお変わらず生きて働いておられる、栄光にあふれた王だったのです。そしてそんな偉大な方に向かって、いつの日かすべての者がひざをかがめて「イエス・キリストは主である」と告白する時がやって来るのです。例外はひとりとしていません。すべての者は、すべての者です。パウロははっきりと言っていました。「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが…」と。天にあるものとはつまり、聖い御使いを含めて、これまでに召されたすべての信仰者たちもそうです。地にあるものとはつまり、今この地上に生きている救われている者も救われていない者もそうです。地の下にあるものとはつまり、墮落した御使い悪魔も含めて、もうすでに救いを知らずに亡くなった者たちもそうです。それらすべてのものが例外なく、イエス・キリストの前にへりくだる日がやって来ると。もちろん主を愛する信仰者たちにとっては、その日は喜びの日です。もうすでに自分の罪を認めて悔い改め、イエス様を自分の救い主として信じ受け入れた者たちにとっては、勝利された偉大な王に向かってほめ歌をささげるその日が必ずやって来るのです。

しかし同時に、今主を信じていない人たちもその日を必ず迎えることとなります。罪の中に死んだままで自分の思いのままに神様に逆らって歩んでいるそんなあなたも、必ずこの方の前にひざをかがめることとなります。救い主などいらないとかたくなに今拒み続けていたとしても、イエス・キリストの前にへりくだる日は必ずやって来ます。そしてその日は決して喜びの日とはなりません。その時にあなたは必ず気づくこととなります。自分の選択は間違っていたと。自分が拒み続けていたそのキリストがま

ことの神であって、栄光にあふれたすべての主であると、そう認める日がやって来ます。残念ながらその日に気づいてその時に後悔したとしても、もう手遅れです。だからこそ、今この方の前にへりくだる事です。まだ救いが用意されているきょう、どうかこの方を自分の救い主として信じ受け入れてください。私やあなたのような愚かな罪人のために十字架にかかって死んでくださった、そのようにへりくだってくださったイエス・キリストに助けを求めてください。もしあなたがこの方を心から信じるなら、あわれみ深い救いの神様はそんなあなたにも救いを与えてくださいます。必ず私たちはこの主の前にひざをかがめる日がやって来ます。今、恵みの日にへりくだるのか、後に恐れと後悔のうちにへりくだるのか、どうか「きょう」と言うその日に、この救い主イエス・キリストを自分の主として帰ってください。

またもうすでにこの主に従って歩いておられる兄弟姉妹の皆さん、私たちにはその日がいつやって来るのかは分かりません。しかし、必ずやって来るその日を楽しみに待つことができます。ひざまずいて「あなたは主です」と喜びにあふれて賛美する時は、一日一日近づいているのです。そうであるなら、私たちはこの新たな一年をどのようにして生きていくでしょう？一体何に心を留めて日々歩いていこうとするでしょう？皆さん、私たちにとって大切なことは、すべてにまさって偉大な愛するイエス・キリスト、すべての者によって礼拝されるべきこの方を覚え続けていくことです。救い主として来てくださった神の御子、この方の払われた犠牲とへりくだりに心を留め続けることです。この方は確かにありえないほどの犠牲を払ってご自身をへりくだらされたお方でした。人として来られる前に持っておられたすべての富や栄光、神様としての権利や力を無にして、代わりに人の性質をとって弱さや苦しみを味わわれたのです。本来であれば、ご自分こそが仕えられるべきそのような王なのに、自ら進んで父なる神様のみこころと、そして人に仕える者として、人の奴隷となられました。そして、私やあなたのような罪人のために、ご自分を死にまでも、実に十字架の死にまでも至らされたのです。この方はあまりにも高い所からあまりにも低い所へとご自身をへりくだらされました。でもそれで終わりではありませんでした。高い所からへりくだって低くなられたお方は、再び高い所へと上げられ、今も変わらず生きておられるのです。

考えてみてください。皆さん、私たちは一体どんなに偉大な救い主によって救われて、どんなに偉大な主によって、主に信頼して歩み続けていくことができるのでしょうか？本来であれば、ただ永遠のさばきだけが価するそんな私たちに、今はただ恵みによって、このような主を父として歩んでいくことができるのです。そうだとすれば、私たちがこの方を知っているなら、この方が受けるにふさわしい賛美や礼拝を、日曜日だけではなくて、日々ともにささげ続けていきましょう。測り知れない犠牲を払ってくださったこのような救い主を知っているのなら、自ら進んで喜んで犠牲を払う者としてともに歩んでいきましょう。こんなにもへりくだられた王の模範を知っているのなら、その模範に倣って私たちも主の前にへりくだり、また神の家族として今生きている兄弟姉妹に対しても同じようにへりくだって歩んでいきましょう。そしてまだこのイエス・キリストの福音を知らない者たちも私たちの周りにはたくさんいます。だからこそ、この主のすばらしさを知っているのであれば、この喜びの知らせを知っているのであれば、それを大胆にともに宣べ伝えていきましょう。必ず主にお会いする日はやって来ます。その日を楽しみにしながら、へりくだられた王の姿を覚えて、そして与えられた一日一日を神様の栄光のために、へりくだって歩み続けていきましょう。